

随想 : 平成とドイツ

その他のタイトル	Ein Essay- Heisei: Meine letzten dreisig Jahre in Deutschland und Japan
著者	金城ハウプトマン 朱美
雑誌名	独逸文學
巻	63
ページ	105-120
発行年	2019-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10112/00018677

随想 — 平成とドイツ —

金城ハウプトマン 朱美

もうすぐ平成が終わろうとしている。平成が始まったあのとき、私は受験生だった。学習塾の週末特訓で、なぜかその日は休憩時間に友人と二人でお好み焼きを食べに行った。子どもだけで食事に行ったのはそれが最初で最後だった。当時官房長官だった小渕恵三元首相が、新元号が書かれた紙をさっと開き、「平成」の二文字を掲げたあの映像を見たのは、お好み焼き屋だった。「平成やって」「ふーん」という会話を友達と交わしたことを覚えている。しかし私にとって「ふーん」と軽い言葉で幕を閉じる30年ではなかった。

今回、日本を離れて生活していた約20年間を振り返ってみたいと思い、このエッセーを書いてみた。人生を振り返る好個な機会を得たことにお礼申し上げたい。書き始めてみると筆が進み、次から次へと種種雑多の事柄を思い起こしたため、10年ごとに通時的に区切ってまとめようと試みた。日本語の表現で擬古地ない箇所があれば、長年の海外生活で日本語の言語感覚を少し忘れてしまっているのだなどご海容いただきたい。これからドイツ語を学ぼうと思っている学生や、ドイツで海外長期滞在を終え再び大阪で生活し始めた人の一物語に興味を持ってくださる方に読んでいただけると幸いである。

平成最初の10年間—希望と絶望

平成元年春、第一志望だった高校に入学できた。一緒にお好み焼きを食べた友人も彼女の志望校に進学し、互いに別の道を歩み始めた。定期券を持ち、毎日、環状線と京阪電車を乗り継いで電車通学するだけでも、うきうきしていた。私は運動がそれほど得意ではなかったけれども、なんとなく運動部に入部したかったので、中学でバスケットボール

部だったというクラスメイトに連れられ、バスケット部の見学に行った。明るくて広い体育館、声を掛け合いながら楽しそうにいきいきとした姿で練習している先輩たちを見て、その雰囲気魅了され即入部した。いざ練習に参加しだすと、フォーメーションを覚えるのが苦手で、頭でわかっているけど体がついていかなかった。さらに致命的なことに、ディフェンスができない。0.1秒の判断ができない。敵にドリブルで私の横を追い抜かれてばかりで悔しかった。それでも仲間といっしょにいるのが楽しくて、試合に出場することも、補欠になることもなかったけれども、毎日練習に励んでいた。

しかしながら、ある事がきっかけで高校2年生の夏合宿の後から部活に行くのがおっくうになった。9月に入り、一度無断で休んでしまったからというもの、授業が終わると部活のメンバーに見つからないように、そそくさと帰宅するようになった。気が付くと1か月近く無断で休部していた。ある日、勇気を出してクラブの顧問を訪ね、退部を申し出た。「受験勉強に専念したいので退部します」と告げたが、これが本当の理由ではないことはすでに見抜かれていた。「ほんまか」と何度か問い詰められたが、「本当です」と何度も返答し退部した。正式に退部したら気持ちがすっきりするのかなと思いきや、逆だった。心が折れた。あれほど意気消沈していた時期はこれまでにない。登校拒否にこそならなかったが、特に仲良しだった一人を除き、部員たちから総スカンを食らった。友を失い悲嘆に暮れ、失恋した時よりも辛かった。「なぜ部活を最後まで続けられなかったのか」と後悔し、「これからも何か新しいことを始めると続かず、やり遂げることができないのではないか」と不安だった。しかし、内面とは裏腹に沈痛な面持ちにならないように平静をよそおいながら学校に通っていたため、いつも疲れていた。

受験勉強とは口だけで学校の勉強すら手につかず、時間が経過していき焦燥感だけが募っていった。将来の明確な夢や希望もなく、教えることと英語が好きということぐらいしかわからず、ただぼんやりと教師や通訳になれたらいいのにと考えていた。

ある日、国語科の読書感想文の課題図書の中から、なんとなくヘルマン・ヘッセ著『車輪の下』を選び、読んでみた。挫折していく主人公ハンス・ギーベラントの姿と自分を重ね合わせて共感した。無性にこの作

品を原文で読みたくなり、ドイツ語を学びたくなった。

そのころ、世界の歴史は大きく動いていた。1989年（平成元年）11月9日にはベルリンの壁が崩壊し、翌年10月3日には東西ドイツが再統一した。ある日、ブランデンブルク門の裏側に屹立していた重厚なベルリンの壁の上で歓喜する人々の映像をテレビで見た。そのときに「これからはドイツの時代がくるだろう。だからドイツ語を専攻しよう。ドイツ文学科を目指そう。ドイツ語の通訳になるのもいいかもしれない」とピンときて、自分の中のスイッチがカチッと入り受験勉強を始めた。

第一志望の国立大学の入試前日に、母は夕食にゲン担ぎにと豚カツを食べさせてくれ、受験当日には弁当を持たせてくれた。しかし、昼食時にお弁当箱を開けてがっかりした。受験生には「見通しが良い」と思われがちな食材であるちくわに、なんときゅうりが突き刺さっていて、見通しが悪かったのだ。「ああ、おかあさん、これじゃ、あかんわ」と思わず声が出そうになった。よからぬ予感は続いた。入試の後、キャンパス内の坂を下りるときに脳裏に浮かんだのは、当時流行していた歌のワンフレーズ、「落ちてゆく夕日に…」であった。「ああ、落ちていく。もうこれで完璧に終わった」と信じて疑わず、予想通り不合格だった。

関西大学2部文学部ドイツ文学科を受験したのは、言葉は良くないけれども、いわゆる「すべり止め」のためであり、父の経済的負担も減らせると考えたからだった。結果、合格したのは関西大学だけであった。いざ、ほかの選択肢がなくなってしまうと、本当に入学してもいいものかと深く悩んだ。恥ずかしくて友達に相談できず、独りで悩んだ末、大学の事務室に電話で問い合わせしてから足を運び、見ず知らずの大学職員に相談にのってもらった。その時に対応してくださった事務の方に「進学校ご出身のようですので、やめておいたほうがいいと思います。ただ、3回生から転部という道もありますので、それを目指して入学されるというのもありかと思います。でも、転部試験に全員合格するとは限りません」とアドバイスをいただいた。考えに考えた末、浪人はやめて、すぐにドイツ語を学ぶ道を選んだ。やりたいことができるから、これでいいと自分を説得した。私にとって運命の大きな分かれ道であった。

あの時選んだ道は、大正解だった。すべり止めという言葉は失礼であ

り不適切だった。というのも人徳のある先生方が集まった素晴らしい大学であったからだ。学力偏差値というものはあてにならず、実際に入学して学んでみないとその大学の良さはわからない。しかし、世間では大学の良さを学力偏差値で評価することが主流であるから、昼間は飲食店でアルバイト、夜は大学に通う私は、偏差値の高い大学に通っていた高校時代の友達の多くと一時期疎遠になった。

入学してみると、ドイツ文学科の同級生は一人で先輩はいなかった。その同級生はほとんど授業に来なかったので、専門の授業は一人で受講することが多かった。ドイツ語は想像していたよりも難しく、英語とごっちゃまぜになり、単語や変化形がなかなか覚えられなかった。私にはドイツ語は向いてないかもしれないと思うことが何度もあった。単語を忘れないように、単語帳をいつも持ち歩いていた。旅行中でも、寝る前になると単語帳を開く私に、友人の一人は「そこまでせんでもいいやん」とあきれていたが不安だったので、その場の雰囲気壊してでも単語帳とにらめっこしなければ気がすまず、我が強く自分勝手だった。

なぜ、そこまで必死にドイツ語を学ぼうと思ったのか。高校時代のバスケット部退部が尾を引き、ひとつのことを最後までやり遂げられなかったことへの後悔と先行きの不安があった。ドイツ語が分かるようになるまで頑張りたかった。そして、ドイツ語を活かせる仕事に就き「独り」で自立して生きてけるようになることを目標にしていた。将来いつか結婚したとしても、何かあった時に困らないようにパートナーから経済的に自立しておきたかった。

ところで2部の授業も関大の先生方が担当されていた。寺川央先生には、授業とは関係のないドイツ語課題を添削していただいた。丸山三友先生の文献講読の授業ではクライストの『ロカルノの女乞食』を読み、難解すぎて毎回ちんぷんかんぷんな和訳を読み上げ、先生を困らせていた。大学の先輩にあたる渡辺孝子先生は授業前に特別授業を行ってくださった。先生方のご厚意のおかげで、私はつまづきながらもドイツ語を習得できた。これまで関大の先生方や他大学の先生方にも大変お世話になってきたことに、心から感謝している。ここで名前を挙げた先生方には特にお世話になり、留学後あらためてお礼を申し上げたかったが、私がドイツで生活をしている間に天に召され、再会を果たせなかったこと

が悔やまれる。

シャウヴェッカー先生のドイツ語コミュニケーションの授業を1回生の時から毎週とても楽しみにしていた。あるとき、「グリム童話は何回も書き換えられています」と先生から聞き、小澤俊夫著『グリム童話の誕生 聞くメルヒェンから読むメルヒェンへ』（朝日選書 1992年）を薦められた。この本を読み、グリム童話を研究したいと思った。ここで気が変わったので、ヘルマン・ヘッセの研究をすることはなかった。

3回生になる前に転部試験に合格し、予定通り3回生から「日の当たる」大学生活を送れることになった。ゼミを決める時期に、最初になんともなく小川悟先生の研究室に立ち寄り、自己紹介すると、「うん、君はもう僕のゼミに入ることに決まっているから」とおっしゃられ、選択の余地はなかった。ゼミはすぐに決まったけれども、卒業後の進路に迷った。同級生たちはみんな渡独経験があり、私だけドイツを知らなかった。友達のドイツでの思い出話をいつもうらやましそうに聞いている自分がいた。大学院でグリム童話研究を深めたかったのは事実であるが、渡独への憧憬が強かったのも否めない。

関大の大学院に進学し、修士課程1年生の夏休みにゲッティンゲンのゲーティンステイテュートに8週間通った。初日のクラス分けテストで、筆記試験は問題なかったが、それとは対照的に口頭試験は問題ありだった。ドイツ語がうまく聞き取れず、ドイツ語が話せなかった。口頭試験の後で試験官に「あなたは文法ができてでも会話がさっぱり。わけがわからないわ」とコメントをされた。なんてストレートなコメント。それゆえに余計にショックだった。ここで落ち込まずに奮起した。大阪に戻ってからもドイツ語会話力を向上すべく、ウォークマンでドイツ語のニュースが収録されたカセットテープを聞いて聴解力を鍛えようとしたり、文通相手を見つけて作文力をつけようとしたり、大阪のゲーティンステイテュートに通い会話力をつけようとしたりと、できる限りドイツ語に触れる時間を増やすように努めた。修士課程2年の夏にはフライブルク近郊にあったゲーティンステイテュートに4週間通い、上級試験（ZOP）に合格した。次は、ドイツ留学を夢見るようになり、幸運にもロータリー財団の国際親善奨学生に選ばれて、平成10年（1998年）の冬学期にゲッティンゲン大学大学院文学研究科ドイツ民俗学科に入学で

きた。

こうして平成の最初の10年間にドイツ語とドイツに出会い、本当にたくさんのことを学んで成長し、人との出会いを大切にするようになった。

在独の前半10年－学びと変化

平成10年7月24日、天神祭りの日にドイツへ旅立った。ゲッティンゲンでは学生寮に入居し、一人暮らしが始まった。一人で気ままに生活できることが楽で、親きょうだいには悪いが離れてさみしいと思ったことは一度もなかった。日本にいる友人ともEメールで連絡を取り合い、離れていても近くにいるように感じたので寂しくなかった。

ドイツ民俗学科（現在は学科名改称し文化人類学・ヨーロッパ民族学）のオリエンテーションでのことである。教室の机はコの字に配置されていた。順番に簡単な自己紹介をし、私が自己紹介をした後、私の向い側に座っていた女の子が私に向かって微笑んでくれた。オリエンテーションの後に彼女から「こんにちは。マティーナです」と日本語で自己紹介されて驚いた。ギムナージウムで日本語を学んだそうで、日本人の友人もいるとのことだった。マティーナはドイツで得た良き友達の一人である。

大学へは週に3、4日、自転車で通った。講義で話されているドイツ語が難しいし、先生や学生が話すドイツ語のスピードも速かった。とにかく予習する事柄が多く、課題に出された学術論文の主旨を把握するだけで力尽き、授業中のディスカッションに参加する余力はなかった。8ゼメスター大学に通い、ドイツ民俗学だけではなく近代ドイツ文学や日本学でも所定の単位（修士課程修了分）を取得した。やればできるしなんとかなるもんだと自分に自信が付きはじめた。

平成13年冬学期から平成14年の夏学期まで、日本学でテキスト講読の授業を週3回担当する機会に恵まれた。そのころ身重で最初は自転車に乗れたが、当然のことながらだんだんとおなかが大きくなると自転車をこぐのが困難になり、休み休み歩きながら移動していた。ドイツでは妊娠中の体重調整がないことをよそに私は20kgぐらい増量してしまい、

今思えばなんてことのない距離でも歩くのが大変だった。講義に出席したり、自分の授業の準備をしたり、博論の準備も進めたりと、毎日忙しそうにしている母親の顔をおなかの子は早く見たかったのだろうか。息子は予定日より4週間以上早く生まれ、早産だった。博士論文提出に必要であり、最後の砦でもあった中国語（漢文）の試験の後に息子は産声をあげた。その前に、徒歩なら5分ほどで行ける距離にあった大学病院に、救急車であちこち迂回しながら10分ぐらいかけて私は搬送された。これが人生初の救急車乗車であった。クーラーのないドイツで、クーラーがよく効いた涼しい車内だったのを覚えている。昨年、日本で救急車に同乗したさい、車内は狭くてごちゃごちゃといろんなものが置かれていたのと比較すると、ドイツの救急車の中は広くすっきりしていた。

出産を機にゲッティンゲンからダルムシュタットの隣町グリースハイムへ引っ越し、見知らぬ土地で3人での生活が始まった。ダルムシュタットの駅に着き、タクシーでグリースハイムまで向かう途中、外の気温は30度を超えていたが、フランクフルト・ダルムシュタット間の電車のクーラーは故障していたし、タクシーにはクーラーもついておらず、猛暑のなか息子の具合が悪くならないか心配しながら家に帰った。

ところで、出産の前に平成13年9月に、腰痛が原因でゲッティンゲンの大学病院に入院したことがあった。二人部屋で、隣のベッドの近くにテレビが1台あった。テレビは有料で、隣のベッドの人に一人占めされていた。飛行機がビルに突っ込む衝撃的な映像、そう飛行機がワールドトレードセンターに突入したテレビ映像を入院中に見て、アメリカ同時多発テロ事件を知った。これまでありえないとされていたことが現実になり、それから世界が一変してしまった。テロの危険性を常に考えながら、ドイツで生活するようになった。

息子が生まれた年、平成14年の1月1日からユーロ通貨の流通が始まった。ユーロが導入されてからもう16年経過しているが、食料品に関して言うと、物価が2倍になったように感じるがよくある。しかし、ドイツ統計局が発表する毎月の物価指数によると、ドイツの物価はそれほど上昇していない。生活している人が感じる物価指数と計算上の物価指数が比例していないことをいつも疑問に思っていた。

平成 16 年 10 月 23 日に新潟中越地震が発生した。子どもが昼寝した時にテレビをつけると、この地震のニュースが報道されていた。ドイツでは日本あるいはヨーロッパ以外の発信ニュースは、センセーショナルな映像付きのニュースに限定されるといっても過言ではない。ドイツ在住だったということもあるが、特別になにか被災地のために行動を起こすことはなかった。早く復興できるようにと祈るばかりだった。しかし、その姿勢は 3.11 の大地震の後に変わった。

平成 17 年の夏から、息子は幼稚園に通い始め、出産育児で中断していた博士論文の執筆を再開できた。それよりも前に一時期、息子をシュタイナー幼稚園で 2 か月ほど預かってもらっていたが、我が家には合わなかった。今でこそドイツで保育体制が整いつつあるが、当時はまだそれほどでもなく、特に 3 歳児以下の保育所が不足していた。息子が 2 歳の時に保育所に入所できたが、保育料があまりにも高額だったので断念せざるを得なかった。

平成 18 年 6 月から学会に参加するようになり、久しぶりに学会に出席してみると、ママ友との子育ての話からガラリと一転し、アカデミックな会話ができるようになると知的好奇心がくすぐられ、水を得た魚のように私は生き生きし、もっと勉強したくなった。日本はさすがに遠かったので、ヨーロッパで学会発表を行うようになった。息子が留守にしている限られた時間を有効活用するため、時間の使い方も研究し朝 2 時に起きることもしばしばあった。早起きは昔から得意なので苦にならない。

渡独した最初の 10 年はドイツで学び、宝物を二つも得た。子どもを通じてかけがえのないことも多く学べた 10 年だった。

在独後半 10 年 - 変化と決断

平成 20 年に夫が転職し、単身赴任を始めた。平日はいわゆるワンオペ（子育ては仕事ではないし、サービス業でもないという観点から、この現代的表現を私は好まない）の育児であったが、子どもが起きている間は子ども中心の生活を楽しんだ。息子を習い事や公園に連れて行ったり、友達の家にも連れていき、子どもたちを遊ばせている間にお母さん

とお茶を飲んだり、という生活だった。うちに誰か遊びに来てくれるときはケーキやマフィンを焼いた。「朱美は日本人なのにケーキを焼くのが上手ね」と何度もコメントされたが、これをどう解釈すべきなのか。ここでは「日本人はケーキを焼かない」という偏見を彼女たちが持っていたと解釈したい。

息子が同年8月から小学校に入学し、だんだんと手がかからなくなってきた。私は新しい仕事も始めた。フランクフルトにある日本語補習授業校で教員として働き始めた。小さいころ夢見ていた小学校教師に本当になれるとは思っていなかったので、毎週土曜日の授業が楽しく、準備は大変だったけれども、教えながら学んだことがたくさんあり有意義な3年間を過ごせた。

ところで平成22年2月2日に入院した。入院までの経緯の詳細は省略するが、盲腸だった。術後に痛み止めの点滴が効きすぎて、目の前の景色が3重にも4重にも縦に重なって見え、初めて幻覚症状を味わった。それからドイツで入院はこりごりと思い、健康管理に、とりわけ食事気に気を配るようになった。

同年4月に予定通り博士論文の口頭試問を受け、無事合格し、6月に博論を出版できたので、念願の学位(Dr.phil.)が息子の誕生日の翌日にゲッティンゲン大学から授与された。退官後、ニュージーランドに移住された指導教授のロルフ・W・ブレードニヒ(Rolf W. Brednich)先生の最後の弟子になれた。今でもブレードニ先生と話をするときは、私しががちに緊張していて、うまく話せない。学位取得までの道のりは長く、何度かあきらめようとした。夫と息子の理解と協力や友人たちの励ましがなければブレードニ先生のもとで学位を取得できなかった。なのでこればかりは、ドイツ的な表現を用いて「私はそのことを誇らしげに思っている」(Ich bin stolz darauf.)と言いたくなる。

しばらくしてから、夫の転職先が決まった。私が首都で生活することになると考えたこともなかったが、グリム兄弟が永眠している町に引越すのも悪くないと考え、家族で平成23年2月末にベルリンへ転居した。まだフランクフルトの補習校での授業があり、3月はフランクフルトへ通っていた。最後の出勤日であった卒業式の日、3月11日に東北地方で大地震が起きた。その時、学校にいたためニュースを見ることも

なく、あの福島第一原子力発電所の爆発を知ったのは、その翌日で、ホテルの一角のテレビから流れてくる特別ニュースだった。その映像が本当に日本から中継されているものなのか、現実のものなのかと、自分の目と耳を疑った。「ああ、もう日本に帰れないかもしれない」と直感的に思い、涙が出てきた。

ベルリンの自宅に戻り、山積みされた段ボール箱をよそに、テレビやインターネットのニュースを頻繁にチェックしながら、「日本は大丈夫か。いつか沈没してしまうのではないか。いや、そんなことはない。でも復興できるのだろうか」と日本の先行きを懸念していた。同時に、海外に住んでいる私に何ができるのか考え始めた。

そこで行き着いたのは、自分がボランティアとして現地に足を運ぶのではなく、復興や今後の日本の減災のために、研究者として役立つことがあればやってみようということであった。私の専門分野は口承文芸研究で、特に今を生きる人びとの「語り」に興味がある。こうして震災に関する語りについて調べ始め、阪神淡路大震災の体験談、新潟中越地震の体験談、東日本大地震の体験談などを読み、被災者が伝えたい事柄を考察した。長岡市などにある震災ミュージアムにも足を運び、語り部にインタビューを行った。この研究成果は平成26年9月にオーストリアで開かれた学会で発表した。ベルリンではグリースハイムにいた時よりも研究と仕事と育児であわただしい毎日を送っていた。

平成29年6月末に一時帰国した。研究仲間とおしゃれなフランス料理店で食事をしているときに、背中を押されようやく決心できた。平成30年4月に帰国して働くとは一大決心をしたのだ。それまでどうしようかと迷い、一歩を踏み出せずモヤモヤしていたが、一度決めてしまうと一気にスイッチが入り、帰国の準備をすすめた。その経緯の詳細はここでは省略するが、要点だけ簡単に述べておく。

通訳や翻訳をすることで、コミュニケーションの橋渡しができることにやりがいを感じていた。しかしバイリンガルの通訳者にかなわないし、私には一生やっていきたい仕事だと思えなかった。勉強しているときほどの情熱を通訳や翻訳に傾けることができなかったからだ。資料を集めたり、文献を読んで考えたりしていると心がワクワクする。その結果を発表することも楽しい。教えることが好きで、人前で話すことに何

ら抵抗がない。研究成果を人びとのよりよい生活につなげていこうとする学問、民俗学をドイツで専攻し勉強していると、いつか自分の研究成果を社会に還元したいという目標を持ち、研究することに喜びと情熱も感じる。他方、日本の学生にドイツ語やドイツについて教え、日本や自分の将来について考える機会を与えたかった。こうして、私は大学教員を目指し、研究者として生きてゆく道を選んだ。それまで子育て、主婦業、仕事に研究といくつもの草鞋を履いていたが、草鞋が一つ減り少し気が楽になった。夫子を残しての帰国であったので、私は腹をくくり、いわば大きな賭けに出た。

家族は私の決断を受け入れてくれたものの、どうやら途中で私の気が変わると思っていたようで、帰国まで残り1か月に迫るころまで、私の本気だということを理解していなかったようである。先輩や後輩、そしてお世話になっている先生方のおかげで、平成30年4月から京阪神の大学で働けることになった。平成30年3月末に私は大阪に戻った。

この10年は息子を通じて地域社会に積極的に入っていき、専門領域の知識も深めることができた。仕事を通じて日本人コミュニティーも少し垣間見ることができ、視野がより広がり実り多い10年であった。高校の同窓会では昔の仲間と再会して歓談でき、その後も時々会うようになった。

平成30年－帰国

大学での授業はとにかく「楽しい」の一言に尽きる。では、何が一体そんなに楽しいのか？と自問してみると、その答えは一言で表現できない。まず、自分がやりたかったことを仕事にし、自分の強みを活かして仕事ができるので楽しいのだと考える。次に、学生にドイツの話をしているときに、目をキラキラさせて私の話を聞き入ってくれる学生を見つけると、とても嬉しい気持ちになるからだと考える。ということは、裏を返せばドイツ滞在中に、どれだけ自分が抑圧されていたのかがわかる。社会に必要とされていないと感じながら生活し、私以外の人にもできる業務を引き受けていたことによる閉塞感の強さの表れでもあると思った。授業と研究発表の準備が重なり大変な時期があっても、それで

も毎日が充実しているので「楽しい」のではないかと自己分析する。

ところで、ある日いつもより家を出るのが遅かった日に、6月18日に電車の中で地震を体験した。震災後に人びとの対応を見たり聞いたりしながら、心底この国の未来を案じた。通勤途中で阪神電車の中で地震が起こった。電車は特別に揺れず、地震があったことに気が付かなかった。鶴橋のホームの手前あたりで停車した。停車している間、誰一人不安そうな顔をしている人はいなかった。むしろ地震速報に慣れているようにもうかがえた。「大阪府で地震発生」のメッセージをスマホで初めて受け取った私にとって、これはただ事ではなかった。すぐにスマホでマグニチュードと震度を調べ、ネットにつながるから大したことはないのかもと思ったが、数値をみてこれは大変だと落ち着かなくなった。しかし、隣に座っていた人も、前に立っていた人もずっと漫画を読んでいたり、ほかの人たちも平静さを保っていたので自分だけ落ち着きがなかったため、私のほうがおかしいのかと錯覚した。

しばらくすると電車が動き出し鶴橋で下車できた。ホームや階段など周りを見渡してみると身の危険を感じ、私は駅の外へ出たが、駅構内や駅の改札の前には不機嫌な顔をして列車の再開を待つ人が少なからずいた。本当はすぐに家に帰りたいが出講先の休講が決まるまで待った。その時、この行動は日本的ではないかと思った。列車の運行再開を待つよりも家まで徒歩で帰宅するほうが早いと思い、約8kmでくてくと歩いて帰った。もしもいつもと同じ時刻に電車に乗っていたら、さらに長い距離を歩いて帰ることになっただろう。そう思うと私はツイていた。

上から物が落下してこないような場所を確認しながら、そして周りを観察しながら歩いていると、携帯電話で得意先か上司と思しき人に遅刻の連絡をしている人と何回かすれ違った。「なんでこんな時にみんな仕事行くんやろ。どうせみんな来られへんやろうに」とこの時はドイツ的に考えた。防災バッグを用意していなかったので、帰宅後、近所の大型スーパーに買い出しに出かけた。ありがたいことに営業していた。懐中電灯など売り切れていたらどうしようかと思ったが購入できた。水も昼時にはまだ十分棚に並んでいた。

夕方になると、列をなして橋を渡る会社帰りの人びとの映像がテレビ

で繰り返し流れた。災害時でもきれいに整列して順序良く橋を渡る様子は、日本人の秩序正しさを象徴する典型的な絵なのかもしれない。しかし、私はそこに異常性を感じた。「なぜそこまでの危険を冒してまで橋を渡るのか。今地震が起きれば橋が崩壊して水没し、人びとは川へ落ちてしまうこともあるということを想像できないのか」と想像力の欠如を危惧した。新大阪駅でタクシーを待つ人々へのインタビュー映像では、待ち時間の長さに苛立つ人びとの声が紹介されるばかりだった。一人でタクシーを1台使うからタクシーの順番がなかなか回ってこないわけで、ドイツだときっと、「〇〇方面に行く人いませんか」とみんなで声を掛け合い、相乗りして帰っていくと思った。そういう発想がないのか、こういうコミュニケーションをとりたくないのか、我先にとはいほかの人はどうでもよいのか、と疑問に思い、また不思議に思った。

震災や豪雨の後、メディアのインタビューでは生活の不便さを嘆く人が好んで取り上げられる傾向にあるようだ。私は、そういう映像を見るたびに、こういった報道の仕方に不快感を覚えた。他人の災難を見せつけ、自分は大丈夫だと安心させるのが本来のメディアの報道目的ではないだろう。こういうふうを考えること自体、日本的ではなくなったのかもしれない。この種のインタビューを見て、メディアのフィルターにかけられていない人びとの声を私は収集したいと思った。

ドイツ的とおぼしき思考を書き始めたついでに、20年の海外生活の後、腰を据えて日本で生活して気が付いたことも少し書き留めておきたい。物申したいことは多々あるが、ここでは日本のゴミ問題と「便利さと迅速な対応やサービスを追求しすぎる社会」とコミュニケーションについて言及する。まず、使い捨てのプラスチック製品やペットボトルの商品が街にあふれているので、そのゴミを考えただけで最初は眩暈がしそうだった。商品を購入後に過剰包装されるのを拒む自分がいた。個装された食品の中身の量が少なすぎることもよくあり、これではゴミが増えるばかりとため息がでる。

スーパーマーケットに行くときと食料品であふれている。特定の棚が空っぽになるということは減多になく、地震や大雨の後に人びとが買いだめしたときぐらいである。国産品だけではなく輸入品もあり、多種多様の生鮮食品がスーパーに並んでいるのを見ると、食料廃棄物の心配をして

しまうので、大型スーパーにはあまり行かないようにしている。近年はドイツのスーパーマーケットも随分と品ぞろえが豊富になり、ドイツでも大型スーパーに行くと同じように心配してしまうため、大型スーパーは好まない。家庭での食料廃棄物量の統計を見ると、日本で一人当たり一日134g、ドイツでは150gとドイツの方が家庭の食料廃棄物が多い。食料自給率が低い日本でこれだけの食品が無駄になっていることはもっと問題視されるべきであろう。便利さと新鮮さを求め、おそらく品切れを好まない消費者の志向を供給側は重視し、食料品が過剰供給されていると簡単に考えられる。店が仕入れを減らすと、消費者は食べたい食材を購入できない日があるかもしれないが、人びとの意識が変わらなければこの問題は解決しない。食に関する教育が、今の生活を変える鍵になるとはわかっている、種々の政治経済問題を考えるとすぐに実行できないので歯がゆい。

ゴミの話が続くが、牛乳パックやペットボトルなど、ゴミを使っておもちゃを作ったり工作したりする文化が日本にはある。クリエイティブなことにゴミを利用しているのは良いことだ。ドイツで同じような文化があるのか、実際にドイツで子育てをしているときに幼稚園やほかの家庭でも観察してみたが、トイレットペーパーの芯ぐらいしか工作に使われることはなかった。しかし工作に必要な道具に、ゴミはリサイクルされていた。図工の時間に使う工具箱に、靴の箱が使われることが多く、既製品が使われていなかった。お絵描きの時に着るスモックも既製品を買わずに、また親がそれをわざわざ縫うこともなく、親の古着のTシャツを体の小さい子どもに着せて、長そでのスモックみたいにしていた。制服文化がドイツにはないに等しいから、皆が同じものを持つことに抵抗があるからそうするとも考えられる。

次に、日常のさまざまな場面で、便利さと迅速な対応やサービスを追求しすぎる人が増えすぎてはいないだろうかと思うことが頻繁にある。「待つ」ことができない人が増えたようで、少しでも待たされるとすぐに切れる人やイライラしている人をよく見かける。たいして待っていないなくても、店員さんが私に平謝りしてくることがある。客にクレームをつけられることを恐れているのだろうか。クレーム対策にとりあえず先に頭を下げておき予防線をはっているのだろうか。人びとの心に余裕がな

くなってきているように感じる。

買い物する際に接客する人もされる人も目をそらす人が多い。このコミュニケーションの取り方に問題はないのかと危惧してしまう。まるで人と人がコミュニケーションをとることを拒否し、機械的に互いに反応しているだけで、これだとサービス提供者がAIやロボットに替わっても何ら支障がないだろうと思ってしまう。自分に必要なサービスや情報をロボットやコンピューターにしか提供されない時代が来たときに、すぐに順応できるように今から準備しているのか。待たされるのが嫌で1秒でも早く買い物を済ませたいのか。いや、そんなはずはないと思いたい。しかし、そんな時代が来ると、人間の存在価値が問われるだろう。そういう社会を人びとは望んでいるのだろうか。AIとロボット導入は「人手不足」の一言で片づけられる問題ではない。在独中は見知らぬ人や店員さんとレジや、バス停などでも何気ない会話を楽しんでいた。私はどこから見ても外国人であるが、そんなのお構いなしで話しかけてくれたし、私から話しかけることもあった。この何気ない会話が日本で消滅してしまわないか懸念する。日常生活における何気ない所作や会話に、つまり何気ない日常生活における語りに人びとの生活や文化が表現されているとドイツ民俗学では考えられ、私はそれらを研究対象にしている。ドイツの民俗学者クルト・ランケ (Kurt Ranke) は人の特徴を「Homo narrans」(物語ること)と言いつけている。もしも人が人と直接会って語らなくなり、対面のコミュニケーションをやめてしまうのならば、人はほかにどんな特徴を持っているのだろうか。

最後に、コミュニケーションのことを考えるとき、ときどきふと思いつくことがある。初めて渡独したさいにゲッティンゲンで知り合った日本人ご夫妻との会話である。ある晩、食事に招待されたときのことであった。

「朱美さんは将来何になりたいの？」と質問を受けた。私は、すかさず自信をもって「人に頼らず独りで生活できるようになるのが目標です」と答えた。すると、「そっか。でも人は独りでは生きていけないよ。それがいつかわかる日が来るよ」「そうね、独りは無理だね」と二人はニコニコしながら私にアドバイスしてくれた。その時はまだ若く、そんなことないと心の中で反論しながら「そうですか」と返事し、生意気

だった。月日経ち、ようやくその言葉の意味を理解できるようになった。これまで私はほんとうにたくさんの人に助けられ、励まされ、お世話になりながら生きてきたことに深く感謝している。喜怒哀楽の気持ちを互いに分かち合える人が一人でも多くいると、それが幸福につながるのではないと思うようになった。これからは、これまで受け取ったこと以上のことをさらに多く、自分から与えお返ししていきたい。

単なるきれいごと聞こえるかもしれないが、何事にも最善を尽くすよう努力を怠らずに生活することを心掛け、日々感謝の心を忘れなければ、こちらから無理やりレールを敷こうとしなくても、人生のレールが正しい方向へと自然に敷かれていくのではないかと思惟するようになった。インターネット上で、成功や夢は努力せずに手に入るから努力はやめなさいという主旨の記事が目につくようになったが、私は決してそう思わない。何か一つ打ち込めることがあれば、たとえ思いどおりにいかなかったとしても、その努力が自信につながり、何かしらの良いことがいつか起こると自分の経験から言いたい。私の場合、ドイツ語の勉強に打ち込んで、ドイツから世界が開けた。そして高校生の時から引きずってきた、あのコンプレックスはいつの間にか消えていた。

平成元年になんともなく運動部に入部し挫折を味わい、なんともなく決めた行動の連鎖が幸いにも平成の終わりに実を結ぼうとしている。人生、どこでどうなるのかわからない。10年後、どこでどうやって暮らしているのかもわからない。新しい時代にドイツの良さと日本の良さがうまくハイブリッドされた平和な世の中を希求し、新元号に期待をよせ、筆をおく。